

# 戦後80周年の英国の対日戦勝記念日(VJデイ)の 催しおよびドイツ・ベルリンの企画展

中 尾 知 代

## VJデイの祝祭

イギリスでは、戦後80周年を祝って、VEデイではストリートパーティなどが行われ、式典が全世界に報道された。それに比べればやはり「忘れられた戦争」(Forgotten War)であるVJデイは、規模としては同等ではない。だがそれでも、全国で約80箇所を越える都市で記念礼拝がもたれた。スタッフォードシャーにある、国立戦争記念植物園(National Arboretum 以下ナショナル・アボリータム)では、8月15日にチャールズ国王とカミラ女王王配(Queen Consort)、対日戦争生き残りのヴェテラン(退役軍人兵士)を招いて、退役軍人会(Royal British Legion)が式典を行い、全英に放映された。ナショナル・アボリータムの式典では、ビルマスター(ビルマ戦線退役軍人会)からビルマ戦線記念財団に再編成された団体の、ポール・コードン氏の尽力で、駐英日本大使と、父親がビルマ戦線インパール作戦から撤退命令をくれた佐藤幸徳中将の部下だったという、マクドナルド昭子氏(ビルマ作戦協会会長)が招待された。会場には、入りきれないほどの人が集まり、メインの会場は柵で囲まれ、柵の外でも式典がみられる様に、スクリーンが立てられた。日本からは、ビルマ戦線遺族10名が英国を訪問し、植物園の中の「極東エリア」に建つ、コヒマの記念塔——「君が故郷に帰ったら伝えてよ、君らに明日があるように僕らの今日を捧げたと」と刻まれた塔のレプリカの前と、日本と交戦したチンディッツ部隊の記念碑の前で慰霊・献花し、さらに、その横にある、捕虜たちを記念するタイムン鉄道の記念碑にも献花した(図1)。その様子はデイリー・メール紙にも報道された。戦後60周年や70周年に比べれば「和解」の様子が強調されたともいえるだろう。しかし、英国の勝利を祝う式典であることに変わりはなく、歌唱、証言、ロイヤルエアフォース(空軍)によるフライングポスト(国旗の色を雲で示す)が行われた。

ただし、式典の式次第を示すリーフレットの最後のページには、チャールズ国王、カミラ王配とともに、昨年6月に天皇皇后が公式訪問した際の、4人並んだ写真が掲載されており、「あらたな友情」を強調する傾向もみられた(図2)。

一方で、VJデイの朝の7時半から、国民に対して行われたチャールズ国王のメッセージでは、長崎と広島のことも語られたが、「多くの犠牲を払った」と日本語に訳されたてはいるが、price paidという表現が使われており、つまりは「自分たち(ないしは日本)がしたことに対する代償(price)を払った(pay)」という意味合いであって、犠牲を悼むとはいえず「日本が戦争を始

めた」という点を強調していることは見逃してはならない。

この点は、1ヶ月後にドナルド・トランプ大統領が二度目の公式訪問をした際に、さらに明らかになった。昨年6月の、日本の天皇夫妻(徳仁氏・雅子氏)訪英のためには2頭だての馬車だったが、トランプには2頭かける三台だての馬車がつき、閲兵の儀式も長時間をとり、ゲストは650名という類をみない歓迎ぶりであった。それだけでなく、「チャールズ国王のスピーチでは、「英米は共に第二次大戦の際に、暴政(Tyranny)に対して戦った」という表現を用い、ヒトラー総統と昭和天皇(Hirohito & Hitler)を暴君と呼ぶことは忘れなかった。

チャールズの父親のフィリップ王配は、終戦後、日本軍の捕虜を英国に移送するのに付き添ったことから、日本嫌いで知られていたが、チャールズ国王の場合は日本向けと米国向けに「使い分け」をしているとあってよいであろう。

和解が強調される時には、軍事的協力の予兆であることは、拙論『迫りくる軍靴の足音—和解と軍事の奇妙な関係』(注1)でも述べ、従来の関係性をリスト化したが、この度も同様の動きがみられた。

昨年、日本の皇室を招いたあとには、駐日英国大使が日本・イタリア・英国と共同で戦闘機開発をすることを発表した。そして、今回のVJデイ80周年の2週間あとには、英国の防衛大臣が来日して日本の防衛大臣と会見し、「日英共同防衛」の政策を確認した。そして、戦艦のプリンス・オブ・ウェールズが横須賀に寄港し、多くのファンを集めた。英国軍と自衛隊のカレー作り競争など、無害そうな、戦闘とは関係のない写真がXに次々投稿され、米軍に飽きている日本人を喜ばせた。戦後80周年を記念して、ビルマ戦線などの極東戦線や、日本軍の捕虜になった人々の憎悪が退役軍人会の中に残っていると、英国軍と自衛隊の共同訓練もやりづらい。だからまずは、元捕虜やビルマ戦線の「和解」を強調し、その後に軍事協力を結ぶわけである。とはいえ、日本人の多くは元捕虜らやビルマ戦線軍人に日本を憎悪している者がいることや、あるいは、嫌悪していたりすることは想像の埒外なのである。無邪気にプリンス・オブ・ウェールズを歓迎するポストがSNSでも多くみられた。

## 王室外交

さきほど述べたように、英国では、ドナルド・トランプ大統領を大歓迎して、英米同盟とウクライナ防衛を強調し、過去のヒトラーと裕仁の暴政成敗を絆とする一方で、それが日本を怒らせたりはしないように、エリザベス女王の三男、エジンバラ公爵夫妻がほぼ時を同じくして日本を訪問した。天皇皇后夫妻と秋篠宮夫妻と両夫妻の親王たちに会い、高野山を訪問し、子どもと交流し、さらに万博も見学するなど、日本が怒らないようにするためなのか、全方向に、念入りに王室外交がなされていることは印象的である。

マクドナルド昭子氏は、BCFG (Burma Campaign Fellowship Group) を建て上げた平久保正男氏が、BCFGが閉会する際に、幾人かのビルマ戦線軍人と子孫と自ら日本人も加わり、BCS (Burma Campaign Society) を立て上げた後に、平久保氏の強い勧めで入ってきたメンバーだが、やはりインパール作戦の生き残りの娘であり、かつ英国人と結婚していることから、平久

保氏亡き後、会長職に就任した。当初はスムーズに運ばなかったが、マクドナルド氏なりに、和解の活動を独自に進め、インドでも慰霊祭を開き、日本でも3年前にビルマ戦線の軍人、リチャード・デイ氏とビルマスター協会の後塵を拝するビルマ戦線記念財団の、ポール・コードン氏らを連れて日本側のインパール作戦の生存者である佐藤哲夫氏と合わせるなど、活発な行動を続けてきた。(私は当初日本側代表理事を務めたが、マクドナルド氏が再編成し、いくつかのイベントを執り行った。デイ氏訪問の際は私も手伝った) 今度、その功績で総理大臣賞を受ける運びだという。日英の和解が進むことは、平久保正男氏の熱望するところではあったが、タイミング的に、常に「日英軍事同盟」的な動きと共に和解活動が使われることも見逃せないだろう。海外との和解は「次の戦争の準備」にも使われる事があり得ることは、心してかからねばならないことだと考える。

BBCでは、対日戦争を記念した番組が2つとラジオ番組が報道され、英国人の元抑留者、元捕虜、ビルマ戦線軍人が登場して証言を行った。一つの番組では、原爆の生存者の女性のオーラル・ヒストリーも組み込まれており、フィリップ・マリズ(BCFGのメンバーかつ、国際和解と友情のトラスト代表・メンバー4名：すでに解散)が中部英国日本人会の助けを借りて広島から取り寄せた石(10センチ四方の四角い黒い石)を載せた記念塔が映し出された。ナショナル・アボリータムでは、2001年に、スマトラ鉄道記念碑が除幕される折に、ちょうど、日本人たちが集めた桜の苗木が「国連コーナー」に植えられるというイベントがなされ、大使や在英日本人市民も集まった。また、グリーン同盟を指揮した人により、楓の樹木が植えられ、ヨーロッパから集められた資金で植えた楓と、日本企業や個人から集めた楓の樹木が植わっている。

「戦後80周年記念の図」には、捕虜・極東コーナーからは遥かに離れた国連の位置に、植えられた楓の樹木のことも記されている。案内人に聴くと、楓の葉が落ちて触れ合う時に、「和解」を象徴する、ということだった。逆の説も聴いた。楓の葉が落ちて、芽吹いて、葉を広げていくときに触れ合うのが「和解」の象徴だというものだ(図3)。

この植樹式については拙著『日本人はなぜ謝りつづけるのか』でも触れたが、2001年に集まった日本人夫妻に、この植樹についてどう思うかきくと「こういうサイレントジェスチャーが理解されるといいんですが」と述べていた。果たして、それは理解されたのであろうか？ 少なくとも楓は残っている。

しかし、遺憾ながら、鳴り物入りで集めた桜の木々は、根付かなかったのか、姿を消していた。風化した立て札だけが、「この桜の木々は、日本とイギリスの子ども達が願いをこめて植えました」と日英の言葉で書いたものが「ジャパンコーナー」というタイトルの下にかろうじて立っている(図3)。これを植樹したのは、和解活動家小菅信子氏と夫君の隼人氏の子ども二人および、BCFGのフレンドメンバーでもあり、BCS創立の当初、後押しもしたフィリダ・パーヴィス氏の子ども二人が代表して植えたものである。平久保氏や大使も植樹した。

「日英の子ども達が桜の木を植えた」、というと、幼稚園の子供らがにぎやかに植えたような印象を与えるが、実際は、和解活動家二人の間で植えられたものではあった。2001年に植えら

れたあと、しばらく養生するところに移されたが、その後根付かなかったようである。時を同じくして、日英グリーン同盟が、イギリスのオークを日本各地に200本植樹するという式典が行われていた。そのどちらにもかかわっていたフィリップ・マリズ氏は、植樹される際に「この桜の樹と楓の樹が触れ合う時に、和解の象徴となればいいと思うんだ」と感慨深く述べていた。しかし、その桜は今は消えてしまっている。桜があった横には、大使館が建てたという、花崗岩の岩に「Reconciliation」と彫られているが、その説明版は樹が折れており、何もかかれておらず、赤い苔におおわれてしまい、なんのことかわからなくなっている(図4)。これらのさびれた記念碑は、なんとか回復しないといけないだろう。このそばには、原爆の塔がたち、「二度と原爆に苦しむ人がいないように」と台に刻まれている。「友情と和解トラスト」は消滅した模様だが、彼の名前と石板は残っている。桜は、ナショナル・アボリータムかは不明だが、植樹のプランが進んでいるという。

桜でひとこと付け加えておきたいのは、CND (Campaign for the Nuclear Disarmament) の団体が植えた、ロンドン中央部カムデンの平和公園に植わる、見事な八重桜の樹木のことである。樹木は健全だが、その下にあった説明版『Planted in memory of the victims of Hiroshima』という板は姿を消してしまっていた。朽ちたのか、誰かにいたずらされたのかはさだかではない。代わりに、2025年の8月6日に、新しい桜の苗木を植えるイベントがロンドンCNDによって行われたという。平和団体の活動はまた別の折に報告したい。

## 8月15日 ノリッチの大聖堂の礼拝

ノリッチでは、8月15日のVJデイに、National FEPOOW Fellowship Welfare Remembrance Associationが主催した礼拝が行われた。ノーフォークやサフォーク、ケンブリッジなど、英国中部の連隊で極東戦線に行った人々の遺族が集まった。驚いたことに、大聖堂がいっぱいになり、両側の回廊にも椅子がぎっしりと並べられ、約2000名ほどが集った。讃美歌、捕虜の歌、説教、讃美歌、死者を悼むラストポスト(死者が出た時の葬送のラッパの音)と、各部隊の旗が旗手によってずらりと行進して中央の回廊を進み、祈りのあいだ、亡くなった兵士を悼んで旗を降ろした。私が座った椅子には、夫妻がいて、夫、妻、ともに伯父が日本軍の捕虜だったという事だった。夫のほうは、しばし、つんけんしていたが、妻の方は軍事史を本にしている人で、あとで一緒に食事をして、ホテルの道まで送ってくれた。

8月15日は、上記のナショナル・アボリータムでの式典と日が重なったが、私は、妻と未亡人のための集まりに出たいと思ってこちらを選んだ。妻や未亡人を中心とした、もっとこじんまりとした集まりなのかと思っていたのだった(図5)。

ノリッチの大聖堂では、赤いポピーの献花が、代表する人々によって捧げられ、中にはアガベ・ワールドの恵子・ホームズ氏も献花していた。式典のあとは、コーヒー、紅茶、ビスケットがふるまわれた。

翌日8月16日は、COFEPOW (Children of Far East Prisoners of War) が開催する礼拝がスタッフォードシャーの都市、リッチフィールドの大聖堂で行われた。夕方には、そこから車で

20分ほどのナショナル・アポリータムのホールで食事会があり、ディナーがふるまわれた。リッチフィールドのホテルとナショナル・アポリータムはそれなりに離れており、親切な隣人が送り届けてくれた。夕飯の席では、この公園をそもそも企画したサー・デイヴィッド・チャイルズが出席しており、思い出を語った。また、食後の話として、捕虜と子どものPTSDをまとめたルイズが短いトークをした。ジュディス・ハーマンや、ヴァン・デル・コークが引用され、PTSDに対する関心がとうとう英国でもシェアされてきた動きを強く感じた。なお、私は、この席に、自分がなぜオーラルヒストリーをしているのか、きっかけはなんだったかを簡単にまとめた紙を持参しており、それを、司会のサー・Everyが読みあげ、皆に紹介してくれた。非常に有難い事であった。

翌日は、朝から屋外礼拝とAGM (年次総会) があり、会計や計画、COFEPOWの今後について話し合われた。そしてランチがあり、くじ引きがあり、(当たりくじをひかされる役に私が呼ばれた) 盛り上がりながら会は解散となった。COFEPOWの役割のひとつは、若いメンバーを入れる事だと皆が言っていた。COFEPOWを組織し、FEPOW ミュージアムを作ったキャロル・クーパーは、現在、認知症となり、もう自分の仕事は忘れている状態だという悲しい知らせもあった。団体は、本やペンなど、いろいろと記念グッズを売っていたが、その中でマグカップに「捕虜の詩」というものが印字されていた。

ある極東捕虜(註；日本軍の捕虜)が天国の扉のところに立っていた

彼の顔は深く皺が刻まれやつれていた

かれはおずおずと聖ペテロに聴いた

「私は中にはいってよいでしょうか」

聖ペテロは聴いた「この場所にところをえるために

どのような事をしたというのか」

私は極東の捕虜でした

ほぼ3年と半年のあいだ

聖ペテロは鐘をならし

真珠色に輝く扉はさっと開いた

「お前は天国に場所を得るだけのことはある

もうすでに地獄で時を過ごしてきたのだから

(読み人知らず)

COFEPOWは私からみれば活発な団体であり、今後も継続していくであろうと思われる。確かに、捕虜の子ども達も、もう70歳から90歳という年齢である。COFEPOWは、各地でも会を開いている。その他にもパーミンガムの捕虜の会もあれば、全国各地で捕虜をしのぶ何らかのイベントが行われていた。場所は、Lichfield, Norwichを含めて全国20か所であった。

さて、COFEPOWは私を受け容れてくれたが(メンバーにもなった)、最も多くの捕虜や未亡

人をかかえるというジャワ極東捕虜クラブの方は、毎年のreunion(同窓会に似た親和会)が4日あったあと、最後に礼拝を行う。その際になら、来てもよいと最初は言われていたのだが、参加者の一人が「I can't stand it」(僕は我慢できない・耐えられない)と言ったということで、参加は控えることになった。これは私に限ったことではない。会長によると、以前に、恵子ホームズ氏と息子さんが来た時には、パーティで元捕虜のひとりが台所にこもって食事をしているので、会長が理由を聞いたところ「日本人と一緒にいたくない」というので、恵子ホームズ氏たちには遠慮してもらったことが数年前にあったとのことだった。恵子ホームズ氏でさえだめならば、なおのこと私もだめだろう。

代わりに、代表のレスリー・クラーク氏と、会い、食事を共にした。そこで私の望みや捕虜に対してこれまで日本が出したお詫びの文書などをみせた。彼女は「英国ではこれは知られていないわ」と述べていた。サン紙に載せたというのは失敗だったとはいえ、日本の首相、特に、捕虜との和解の問題では長年努力を積み重ねた永瀬隆氏の妻、藤原佳子氏が応援会長を務めた橋本首相が書いた文章は、一応は読んでもらいたいものだとは思った。レスリー氏が感銘を受けたのは、50周年の村山談話であった。「これはアポロジーだわ。残念なことにね、皆、こういうことを知らないの」と彼女は述べた。

彼女との面談を終えたほか、BCFGを支えたブラウンレス夫妻の娘さんと息子さんと会うことがなかった。陽気で熱心に私の調査を支えてくれた牧師夫妻の父親似のベンと母親似のアリソンは、「両親はあなたの調査にエクサイトして、それにあなたのことをいつもfondlyに話していた」という事を聴き、父母の写真を渡してくれた。また、アリソンは、戦後80周年を記念して編まれたEブックのBook of Remembranceに、BCFGの事を記したことを教えてくれた。その他にも、日本強制労働生存者の会の代表だったアーサー・ティザリントンの娘さんと会った。彼の墓石には、彼が最後まで求めた正式な言葉が日本語で「謝罪」と彫り込まれている。見る側の英国人にとってエニグマのようにしたいのだと、亡くなったアーサーの息子は述べていたが、実現したのである。アーサーが最後まで書いていた『靴の中の小石』という、日本との交渉の本の原稿は預かった。日本で喧伝された話では、大使館が開く会にティザリントン夫妻が喜んできたという話であったが、実際には『日本人はなぜ謝りつづけるのか』で書いたように、大使館が製作した「和解への道」というビデオを見た彼は苛立ち「おべっかだ!」と怒って席を立てってしまったものだった。彼は、それらとの交渉を逐一書き残すと宣言していた。娘さんにとっては、アーサーが求めたものは対等な扱いと「justice」だった。そのジャスティスがどう実現されるかは、まだ課題として残っている。

また、前後するが、6月には、Fepow History Research Groupというグループが、捕虜にかんする種々の調査を発表する会議が2泊3日で行われた。この会は、日本軍の捕虜への仕打ちが、どのようなものであったかを、感情的にというより、理性的に解明していこうという方向性の強いグループであり、2年ごとに会議を行っている。当初とメンバーは入れ替わってはいるが、オランダからも民間人抑留者を調べているゲストを招いたり、インドの捕虜の運命について語

るものもあり、内容は豊富である。ある発表で、日本軍が与える食料のカロリーが少ないだけでなく、コメの胚芽をとってしまったことで、ビタミン不足になったという発表があった際に、一人の捕虜の息子が「頼むから教えてほしい。なぜ、なぜ、日本軍は胚芽をとってしまったのだ?」と立ち上がって、泣きそうな声で尋ねた。私は手を挙げざるを得なかった。「日本人にとっては白米こそが純粹の証で、水晶米、銀シャリなど、白いコメが称賛され、玄米や麦や位の低い食べ物とされている。タイメシ鉄道(タイ)の鉄道隊の士官は「捕虜はいいものを食っている」と思ったと述べています。文化の差という要素もあるわけでしょう」という説明を行った。「米しかもらえなかった」というのは、捕虜にとって虐待のあかしともされる事であるが、腸の短い彼らにとって、おかゆの繊維質は消化できないものでもあり、肉やバターが不足していた。また、ライスイッチ、といって、米を食べると、油分が少ないために、体が乾燥してかゆくなるという症状も報告されている。鉄道隊の士官は、ドカベン(土方弁当)——二倍の大きさがある——に詰められた米をみて、「いいもの食ってるな」と思ったと述べていた。そこには明らかな文化差異と、それに基づく誤解や無理解がある。意図的な残酷さではなくとも、である。

この会議はリバプールで行われ、ここでもまた、80周年記念礼拝がもたれた。

## りすぼん丸の映画

また、リバプールでは中国が作った映画『りすぼん丸』(Sinking of Risbon Maru)が上映され、皆で見に行った。りすぼん丸の生存者にはオーラルヒストリーインタビューをしたことがあり、彼が話す途中で、あえいで泣き崩れる様子は拙著にも書き、幾度かの発表で皆の意見を聴いている。映画の中では、魚雷を受けて沈んだ船から泳ぎ始めた捕虜たちを、日本兵がオールでついで水に落としかが語られ、中国の漁船が出て行って、溺れる捕虜を助け始め、それをみて「通報される」と思った日本側も救い始めた、という物語が語られる。そして、救われた英国人捕虜たちのうち3人は中国人に扮装して、連合軍にまでりすぼん丸の実態を報告しに行く。映画の最後は、りすぼん丸の人々を救った中国の漁師のところに、救われたひとびとの家族が訪ねてきて彼を取り囲む、という終わり方で、まさに『シンドラーのリスト』や『杉原千畝』の映画を彷彿とさせるものであった。習近平首相は、英国を公式訪問した際に、この『りすぼん丸』の捕虜を救った中国人の漁師の事について触れており、中英関係の絆にしようとしている事をひしひしと感じる。映画の中にはりすぼん丸事件で戦犯となった経田船長の遺族もでてくるが、あまり日本側に同情心は感じられない。国策映画であり、元捕虜の政治利用と言われても仕方ないのではないかと、思わせる部分がある。インタビュー相手を探すのに、新聞に全面広告をうったり、生存者を尋ねにカナダに行ったり、日本で遺族を探偵を雇って探したり、とかなりの制作費をかけている。この資金はどこから出たのかを、(日本人の私には)疑問に思わせる映画ではあった。

## エリック・ローマクスの娘

この会議に、スピーカーとして呼ばれていたのが、岡山県の永瀬隆氏との和解で有名になっ

た、エリック・ローマックス（邦題『癒される時を求めて』）*Railway Man*を書いた）人の子の娘、シャーメイン・ローマックスと、映画「レイルウェイ 運命の旅路」を作ったアンディとフランクであった。映画は、二番目の妻パトリシアとの出会いからロマンティックに始まるが、PTSDに悩む主人公が中心になる。永瀬隆氏は憲兵隊通訳として、罪を逃れ、憲兵ミュージアムを作ってみせているという設定になっている。実際の永瀬隆氏がみたら怒ったであろうような内容ではある。（しかし、日本人側が戦争で死んだ、というのを「殺された」と言い返させ、「戦争の悲劇」と言うのに対して「戦争の犯罪だ」という点では注目すべき点もあった。）シャーメインも「私の母が観たら傷ついたと思う、死んでいてよかったと思う」と述べていた。最初の妻アグネス（ナン）は、夫が家をあけている間、育児と支払いに必死であり学校の費用さえまならない日が続いたという。その間に、姉は12歳で倒れ、片腕が麻痺し、その後も幾度か倒れて40歳代で亡くなる。まだ離婚していない時に、エリックは、パトリシアと住み始め、それで母は離婚を決意したという。和解の物語の裏は複雑である。「でも私の人生は、父にドミネイトされている」と、シャーメインは慨嘆する。6月に映画についてしゃべったことや、共に「*My Enemy, my friend*」と観たことで、かなり疲れ切ったと彼女は述べていたので、詳しい話は翌年聞くことにして別れた。彼女は自分の母のことを「彼女はグレート・ウーマンだった」と言っており、その内容を今後、もっと聞きたいと願っている。私は、彼女の姉のリンダの死について、フロイトの解釈を用いて分析したが、リンダについてはなお詳しく聴く必要があることも感じている。エリック・ローマックスを扱った番組では、必ず後妻のパトリシア（パティ）がエリックを支え、最初の妻であるナンについては、言及されない。「*My Enemy, My Friend*」を共に視聴したあと、シャーメインは「ああ、私の母が少しでも言及されていれば」と嘆じた。ローマックスの本は献辞に「3人の子ども達とその祖母に」と書き、妻にも触れていない。エリック・ローマックスは「和解」のシンボルとされており、戦後80周年VJデイのエジンバラの記念礼拝には、エジンバラ公爵夫妻が列席し、シャーメインが父の本から和解の一節を読み、永瀬氏とローマックスのビデオクリップを見せる（永瀬氏がローマックスの折れた右腕のあとを撫でさすっているところ）という機会もあった。その他、シンガポールのチャンギで抑留されたオルガさんに会いにでかけ、話を聴くことができた。

以上が英国でのリサーチであるが、「戦後80年」を境に、いろいろなことが動いていることを感じる。特に、ふたつの戦争が怒っている現在、外交に大きく左右されていることを感じる。

この論文を書いている間も、イスラエルによるガザ攻撃（イスラエルからみれば、ハマスのテロによる戦争）と、ロシア・ウクライナ戦争は続いている。「戦後80周年」は、60周年や70周年と違い、実際の戦争を背景にして行われている点で、リアルである。英国は、「フリーダム」を護るための戦争だったという姿勢を崩していない。対ドイツ・ナチスとの闘いがあったから無理もないのだが、みずからの植民地支配や帝国支配についてはどうであろうか。日本では常に、捕虜問題を語ると「大英帝国の植民地主義支配への戦いだった」と口にするし「英国は植民地支配を反省しないくせに」という。これについてはサー・エブリが「英国の帝国は必ずしもよいことばかりしてきたわけではない」ことを語っており、以前に比べると、英国側も帝国主義

の反省が増してきている様子を感じる。また、帝国戦争博物館ではアフリカのコーナーが拡充されており、プロジェクションだが「私たちはかれらを搾取した」という言葉も現れるなど、英国側の帝国支配反省も徐々に広まっている。また、チャールズ国王はケニアの独立運動を迫害した事について謝罪した。

日程の制約で見学はかなわなかったが、9月16日からはナショナルアーミーミュージアムで「忘れられた戦争」という、ビルマ戦線の展示が行われることになっている。それ以外にも、エセックスの教会ではビルマ戦線のおりに撮影した写真の展示会がしたり、またケントでは、馬に乗った市長の使いが「今日、日本に勝利した」と読み上げるパフォーマンスをするなど、本論に掲載した以外のイベントも小規模ながら各地であった模様である。「日本との闘い」「VJ デイ 80周年」は、こうして英国全土で記念され、記憶の継承と「地層への沁みこみ」が行われている。その中で、相互理解的・対話的・内容理解的に話が進んでいるかと言えば、「FEPOW HISTORY RESEARCH」の試みを除いては、まだまだ少ないし、そのイベントでさえ、英国の視点中心のものが殆どである。たとえば、なぜ日本が戦争を始めたのか、日本の植民地支配はどうであったのか、原爆は必要であったのか、などの議論はなされていないのが現状である。原爆にかんしてはD-DAYの祝典の際に各国の首脳が集まったおりに、「戦争を終わらせたもの」としてきのこ雲が表象されるにとどまっている。(ロシアのプーチン大統領だけが、十字を切って哀悼の意を表した)石破首相(元)が、2025年9月の国連総会の演説で言ったように、「きのこ雲の下で何が起きているか」を知らせる事は非常に重要なことである。(以前、英国の民放でこの問題を扱い、被爆直後の子どもの写真を見せたが、このプロダクションは潰れた)

捕虜問題と、原爆の関係については拙論で一度説明したが、原爆がなければ捕虜が皆殺しにされていたという理解が、捕虜と家族の間では共有されており「原爆がなければ、私はここにいなかった(生まれていなかった)」と言う元捕虜の子ども達も多い。しかし、そこには、原爆で殺された人たちからも産まれなかった命があることへは想像力は及んでいない。

戦後80周年の催しのもう一つのものとして、中世に交易の中心地として栄えたキングス・リンという都市のストーリー・ハウスで開催された「死の鉄道を生き延びて」とうい展示を観た。展示されているのはサフォーク州の、生き残り兵士の集めたものの展示であり、BBCが昔製作した、捕虜番組が流されていた。そこではまだ若い永瀬隆氏や、斎藤大佐が出ており、タマカンの収容所の責任者だった斎藤は「捕虜は健康で食物も十分であった」と述べている。(そしてそれはもちろん虚偽に聞こえる)

展示自体は、筆者にとって珍しいものはさほどなかったが、最後のまとめの文章は、現存する「捕虜問題」をクリアにするものであった。そこには、元捕虜が戦後70ポンドを、日本人の海外資産凍結から払われたこと、英国政府が1000ポンドを支払ったこととともに「日本が捕虜扱いについて謝ったかどうかはまだ論争がある (controversial) という表現があったことである。

日本政府は、拙著『日本人はなぜ謝りつづけるのか』の巻末資料でもまとめたように、これまで天皇が「心の痛み」「遺憾 (regrets) を述べたり、橋本首相がサン紙にお詫び文を投稿したり

したが、「ちゃんと謝られた」と認識する元捕虜や家族は少ない。サン紙は、軽侮されるタブロイド紙で、確かに読者数は多いが、低俗紙にカテゴライズされており、元捕虜が読むことは少なかったし、知っても「ヌードの女性が載っているような新聞に掲載された」ことに憤慨する者も多かったのは拙著で述べたとおりである。捕虜の子どもの世代でも、サン紙に載せたと知って、笑い出す人もいた。「なぜタイムスに載せないんだい？」ということはしばしば聞かれるが、これは当時のトニー・ブレア首相が、タブロイド紙を労働党の味方につけるため、exclusive(サン独自の特ダネ)扱いで、掲載を日本側に薦めたからである。アリスティア・キャンベルも絡んでいる。タイムス紙とサン紙は持ち主は両方ともルパート・マードックであったので、両方に掲載することは可能なはずだった。しかしタイムス紙は、「今日日本が日の当たる場所 (in the Sun) で驚くべきことをする」という、四角で囲んだノーティスを出すにとどまった。In the Sunというのは、「サン紙で」「日の当たる場所で」と、カイザー(ドイツ)が日の当たる場所に植民地を求めたことに対する皮肉で使われる言葉である。二重三重に嫌味な表現を使ったわけだ。そして、サン紙も、表紙にはでかでかとJapan Apologized to the SUN と掲載し、3ページのヌードの女性を越えてしか読めない頁に、このお詫び文を掲載した。

さらに問題なのは、拙著の巻末資料(岡山大学レポジトリ掲載)をみて頂ければわかるとおり、この「お詫び文」が、自分がいかに英国が好きかという事や、ブレア首相が東京で歓迎されたということ、経済的協力と未来志向で行こう、というただらとして文章で、トニーにお詫びをしたとはいっているが、捕虜に詫びるという文章がないことである。橋本首相をDTIのメンバーが代筆をしたという話もあったが、彼が口頭で話したことを誰かが英語にしたのであろうと思われる。

これらのお詫びの言葉が(不満であっても)元捕虜にリーチしないことは、それこそ遺憾な事であった。アーサー・ティザリントンは、「regretというなら、私たちほどregretする人間はいない。私たちは意味のある(meaningful apology)を求めていると最後まで言い切ったが、お詫び(owabi)ではなく謝罪(Shazai:自分が行った罪を認めてそれに対して謝る事)という言葉日本政府や外務省が回避し続ける理由はなんだろうか。Apologyの公式訳まで「お詫び」にして、「謝罪」と言う言葉を使えば補償金の支払いが要求されるということを恐れているからか。ないしは、やはり日本が起こした戦争は自衛戦争や西洋の植民地支配への怒りからであって、「罪」ではない、ということか。あるいは、罪は、戦犯裁判などで「償いは済んでいる」という感覚なのであろうか。故スリム卿は、「日本人はatonementとapologyを混同している」といい、あるドイツと日本のミックスの青年は、「罰される事(戦犯などで)」と「こちらから、悪いと思って謝る事」は別だと言いつつ。これは日本人にはわかりづらいロジックだが、国際関係を続け、日本が信頼感を得ていくためにはどうしても必要なことだと思う。この件に関しては、スコットランド捕虜連合の代表の妻、アイリス・マガウランは「自分たちのしたことではないが、自分たちの祖先のしたことについてはすみませんでした」と言えば尊敬を受けることができる、と言っていた。一方、この度あった、伯父が捕虜だった人は「もう遅すぎる」と言っていた。

次世代である私たちはどうすればよいのだろうか。

6月のリバプールの会議では、恵子・ホームズ氏の影響を受けたエイミさんが、「謝ることは重要」と言っていた。それに異議はない。だが、日本人の8割近くが、捕虜や捕虜のPTSDや、捕虜の家族がうけるPTSDの影響について知らないときに、一部のクリスチャンが(日本のクリスチャン人口は1パーセントである)謝ったとしても、おそらく本当の交流にはなるまい。今上天皇の修士論文の指導教官の従兄弟も日本軍の元捕虜であり、皇太子時代に彼が写真に出た時「俺の従兄弟が裕仁の孫と一緒に写真に写るとは！もうお前とは口をきかない！」とって電話を切ったという。そういう哀しみを押さえて指導された徳仁氏は、せんだって、英国に招待された時、何かひとこと、捕虜問題について言う事ができればよかっただろう。せつかくの、外交カードとしての皇室外交をそれに使えなかったのは残念なことだと考える。

## 日本と捕虜問題・ビルマ戦線問題

日本の戦後80周年と照合するとき、ビルマ戦線の和解は進みつつあるし、ビルマ戦線の元兵士自身が高齢化して日本への憎しみは忘れられていくようである。だが、対話は今後も必要であろう。日本がなぜ戦争を起こしたのか、ビルマ戦線においてはどういう意味合いをもったのか、を追求し、理解しあう必要がある。日本はビルマ独立を標ぼうしたが、アウンサンは最後に寝返った。その、ビルマも含めての「和解」や「相互理解」は今後も必要となるだろう。それは式典などによる、情的な和解ではなく、理由を掘り起こす知的和解が必要、という事である。日本大使の式典の参加も、その契機になればと思う。なお、元捕虜問題はまだまだ残滓が根深い。ジャワ捕虜クラブの代表は、相互理解は大事だろうし、日本の若者が、捕虜問題を何も知らないのは本当に残念だ、という。

35年間、岡山大学で教え、また非常勤講師なども務めてきたが、捕虜問題を知っている人はごくわずかであった。というかいなかった。教科書にも資料にも出ていないのだから仕方がないだろう。「これほど、大学に入るために勉強したのに、なぜ、私たちはこのことを知らないのですか？」と疑問や怒りをぶつける学生もいた。メディアは流さないし、流しても和解の問題だけだし、教科書にも副教材にも載っていない以上、(おそらく指導要領にも)英米オランダで問題とされている捕虜問題や民間時に抑留者問題を、一般の人が知る機会は驚くほど少ない。今回の単著を出版したことで、医師や心理士などに問題は広がったのだが、これらのトラウマについては認知度が非常に低い。

ひとつの問題としては、「和解はもう終わった」という認識が広められたり、和解の前に「捕虜や子ども達は何に怒っているのか」がしっかり理解されていないことに問題がある。

繰り返しになるが、戦後80周年にも残る元捕虜の問題(BBCでもラジオ番組が二つ報道された)は、何が問題であったのか、なぜそうなったのか、その後始末をつけるにはどうしたらよいか、を国民が、事実を知った上でディスカッションをすることが必要である。昨年の卒業論文で、日本語を学ぶ英国人にオーラルヒストリーをした学生がいたが、「日本についてのイメージ」については、あえて捕虜のことは質問しなかったにもかかわらず、それでも「うちの御祖父さんは、伯父さんが捕虜を本国に移送した人で、日本嫌いだった」という、捕虜の話が出た。

2024年になっても、捕虜の親族やビルマ戦線の親族は数多いのである。(今回、英国で下宿した大家さんの父親はバターン死の行進の生存者だった) 私たちは、80年前の戦争の生き残り・子孫に取り囲まれて生きているし、私たちがサバイバーの子孫なのである。

今後、いかに捕虜への過酷な扱いが日本に広まるかが課題となってくるだろう。なぜなら歴史から学ばない人はそれを繰り返す、という考えは西洋ではしっかりあるのだから、日本の若者がそれを認識していない場合、ドイツのような信頼は得られないからだ。国連の敵国条項を取り除いてもらうためにも、日本は開戦事情を説明し、また、日本が起こした加害性のうちの、勝者の国に残したトラウマに向き合うべきである。それを認めて初めて、私たちは、原爆の被害や、海外ではあまり知られていない空襲の被害について、そしてソ連の抑留者や、南方抑留者について、あるいは不公平な戦犯裁判について語り、海外を批判することもできるだろう。戦争に敗北した側から、説明をしなければ、勝者の理論の中では立ち往生するだけである。

## 戦後80周年の国際オーラル・ヒストリー学会——ポーランド、クラコフにて

なお、戦後80周年において、ポーランドで国際オーラルヒストリー学会があったため、そこで印象に残ったことに触れておく。55か国から参加者がおり、400本以上の発表のある国際学会であった。

ポーランドのクラコフは、ドイツ軍のポーランド侵攻後、ドイツの本部が置かれたため、爆撃を免れた都市である。重厚なキリスト教会、美しい街並みなど、英国よりも古い王国であることが印象に残る都市である。ポーランドの最も古い大学は、コペルニクスが学んだことで著名だが、古い知識を蓄えた都市である。国際学会では、デジタル時代のオーラル・ヒストリーのセッションに人が集まり、またトラウマにかんする言及が多かった。トラウマはどこのもいも、中心の話題のひとつであることを認識させられた。また、次世代に記憶を継承するという点も、強調するセッションが多くみられた。次世代に記憶を継承するという点では、特に、絵本にして、それにオーラルヒストリーのSDメモカードをつけたものを作るという発表が印象的だった。また、日本では少ないが、オーラルヒストリーをダンスにしたり、歌唱にするセッションも興味深かった。ポーランドは、ドイツに占領された期間、すべての大学が閉鎖され、知識人が捕らえられ、処刑された。クラコフの身近にはアウシュビッツとビルケナウ強制収容所があるし、クラコフの郊外にはユダヤ人ゲットーの跡が残っている。そういう環境の中では、国際オーラル・ヒストリー学会にも当然ながらユダヤ系の人々も多く参加した。最後の日のセッションで、2023年10月7日の、ハマスによるイスラエル攻撃の被害を受けた人々のオーラル・ヒストリーを行った人の発表があった。この攻撃は日本ではあまり表面化しないが、イスラエル人二千名を殺し(うち40名はアメリカ人)、200人を虜にしたものである。イスラエル人にとって、それは9.11にもなぞらえられる、あるいは真珠湾攻撃にもなぞらえられる突然の攻撃だった。そこからガザ攻撃が始まるわけだが、発表者は、攻撃を受けた人びとの声を記録し、またXのポストやショートメッセージなどで交わされる会話も「聴き取り」の一環として扱った。彼女が抑えようとしても、ユダヤ人としての怒りは収まらない。当然ながら、質問が出た。「ガ

ザの人々の声はきいたのか？」と。回答は「どうやって？」であった。戦闘状態にある敵国同士の間でのオーラル・ヒストリーはもちろん、できない。同じセッションのベツレヘムに住むという女性は、「10月7日攻撃のオーラルヒストリーをするには早すぎる」と認めたが、同時に、「ガザがどういう状態であるかは、私たちには一切情報が入ってこない」と述べていた。日本ではXに、ガザ爆撃の様子や子どもの飢餓状態がよく映されるし、ジャーナリスト殺害が報道されるが、筆者が今回聞いた限りでは、イスラエルでは報道管制がしかれ、そういう映像は一切、流れないようである。ベツレヘムの女性は子供をつれてインドに旅行に行くと言っていた。「恵まれているのはわかっているけれど、そうせざるを得ない」と彼女は語っていた。ホロコーストを経験したユダヤ人にとり、今回のハマスの攻撃は第二のホロコーストなのである。「ガザの声を聴いたか」「二国共生は可能か」と聞いた人々は、ユダヤ人発表者の側の怒りをきいて、最後は席をたって外に出て行ってしまった。筆者は、その後シンドラーがユダヤ人を使った工場を見学し、ゲットー跡を歩き、(アウシュビッツとビルケナウは以前訪問したことがあるので)彼らの声を聴き定めようとした。ゲットーの壁は一部が今も残っている。日本で学ぶ多くのホロコーストの記録と以前も行ったユダヤ人の博物館以上に新しい知識は無かったが、ポーランド人が多く殺されたことは初めて知ったことではあった。

## ドイツ・歴史博物館の戦後80周年記念企画

では、それを行ったドイツはどういう記憶を残しているのだろうか？

そう考えた筆者は、今回、最後の旅程にドイツを組み込み、ドイツの80周年記念の一部をみようとして、帰途にベルリンに立ち寄り、歴史博物館の特別企画展二つと、和解資料センターの企画展と常設展示をみた。歴史博物館の企画展は、『戦後のドイツ表象』と『とられなかったもう一つの道』展である。戦後のドイツ展は、ドイツのホロコーストや戦争犯罪が、いかに、ヨーロッパ全土とソ連で巡回展として、1945年から48年の間に諸国をめぐって人々に晒されたかを、当時の諸国の写真を元に解説するものであった。自分たちの悪行がいかに外で早くに広まったか、また、英国ではアンチセミティズムから、ユダヤ人迫害としてより、捕虜迫害として公開されたことなどが、わかりやすく展示されていた。私は思わず日本と比較した。日本は、捕虜や民間人抑留者に過酷な扱いをしたことが映画化されると、カンヌ祭に出さないように働きかけたり(1956年)、ホロコーストの本(ラッセル・リヴァプール卿著)を日本語で1956年には出版しても、同じラッセル・リヴァプール卿による日本の戦争犯罪の本は訳さないなど、日本の中で、海外でいかに日本の悪名が高いかを抑え込んだ。そして今も、「成功している和解」表象以外はなかなか受け付けようとしない。『宇宙戦艦ヤマト』などのポピュラーカルチャーでも、敵はデスとヒトラーをかけたデスラー総統であり、敵・悪はナチスドイツであり、日本は善の側であるという風に表象し、日本の戦争犯罪にかんしては目を背けてきた。日本の戦争犯罪を扱った映画がヨーロッパ各地で購入され公開されているにも関わらず、我関せず、という顔をしてきた。ドイツは自分たちがどのようにヨーロッパの目に移ったかを直視している。それに感心した。もう一つの企画展『とられなかったもう一つの道』(The Road not taken)は、ドイ

ツの原爆開発について扱い、またドイツの戦後の民主化運動についても扱う。特にドイツがいかに原爆を開発しようとしたかは詳しく写真と図説つきで説明されており、ドイツが開発に成功していれば勝ったかかもしれない可能性も示唆する。しかし、説明版にはソ連軍（赤軍）の侵攻が早く、開発が頓挫し、また赤軍の下で開発がストップされた事、さらに、米軍が開発していた原爆は、ドイツを目的ともしていたが、ドイツが早めに降参したために、結局、まだ終わっていない戦争を戦っている日本の広島と長崎に落とされた、という解説となっている。

日本の原爆はやはりきこ雲だけで、放射能などのことは説明がなかったし、アメリカは二発目を長崎以外にも落とそうとしていたことなどは説明がなかった。また、原爆で苦しむ個人の顔はどこにもなかった。それにしても、日本も原爆を開発しようとしていたことは、海外から指摘されているが、日本はそれをこういう展示で示そうとはしない。上記の「自分たちの悪行の表象」に着目するようにドイツは自らの行為をきちんと記録し展示することには感銘を覚えた。

## ドイツ 「追放、避難、和解」のための歴史資料センター

さらに、「追放、避難、和解」のための歴史資料センターでは『The Trek』という、ドイツ人の引揚の様子を移した写真展示があり、ドイツが敗北し、赤軍が近づいてきた時に、引き揚げを命じて皆が荷物や乳母車を押して行進にでかける様子がうつされた写真が展示されていた。この写真は、プロパガンダ写真でも著名な写真家が写したものであり、目的ははっきりしないが、これらの引揚に付き添って移動いろいろな状況写真を残したという。なぜ、皆微笑んでいるのか、という疑問がついていた。どういうプロパガンダかはわからないが、写されたもの以外にももっと悲惨な状況はあったのではないかと、思わせるような、笑顔を浮かべた人々の写真が目立つ。日本の、満州引揚の写真と比べると、悲惨さは少ないように思わせる写真ではあるが、第三帝国として各地に住んでいたドイツ人たちは、引き揚げで苦勞したことであろう。彼らが持ち運ぶ荷物も非常に重そうである。

常設展示では、2階が移民、3階が戦争暴力となっており、移民としてドイツに来た人々の等身大の写真と語りが聴ける。3階の常設展示では、ドイツの各時代の様子を展示したものが並べられている。なお、戦争には性犯罪がつきものだ、として、ドイツ兵がソ連の女性をレイプしたこと、また、ソ連兵がドイツ女性をレイプしたことが解説でははっきり語られている。各地での暴力という、柵を引き出すと映像やアーティファクトが置かれている柵には、北朝鮮と韓国で別れた兄弟の再会や、ビルマのロヒンギャ虐待なども目配りがよいが、日本の空襲や、原爆はなかった。いや、ドイツに対する空襲の展示もほとんどみあたらなかった。これは、おそらく歴史博物館の常設展示にあるのだろうが、現在、改装中で見ることができなかった。

## ニューメディアと戦争

さて、英国—ポーランド—ドイツを巡る旅をしている間、私は記録のためにもXに時折感想を書いていた。そこで気が付いた点が二つある。ひとつは、ヤフーニュースは2022年から欧

州圏では見られないという事。さらに、過激と思われる映像やアダルトビデオ系の画像は、年齢制限がかかって見られないことである。(年齢登録を確認するとカバーがはずれる仕掛けである)さらに、ポーランドではあまり気が付かなかったが、ドイツでは親イスラエル派のポストが多く流れてくることである。国連でネタニヤフ首相が演説するときに、多くのメンバーが会場を退出したことは日本でも流れたと思うが、ドイツでは、それを嘲笑する、イスラエルからのポストが多く流れ、またネタニヤフの演説を詳しく翻訳したのも何本も流れていた。それを多く「いいね」して保存したからか、次々にプロユダヤの、ポストが日本に戻ってきてからも流れてくる。日本にいる時や、イギリスにいる時はガザ爆撃の様子や、子どもの飢餓の様子、環境活動家のグreta・トゥーンベリが率いるフムードが多く現れたが、筆者がドイツに入ってから、ユダヤ人の言い分、パレスチナ、ハマスと戦う女性兵士、10月7日の攻撃で死んだ一人一人の画像(若い女性や赤ん坊)がいくつも流れてくる。アルゴリズムのせいもあると思われるが、イギリスではみられなかったポストがいくつも流れ、同時に、ガザ攻撃も一般的なものしか映らず、ジャーナリスト攻撃などもあがらない。ニューメディアも、明らかにその国を占める多数の人々の読むポストが選定され、アルゴリズムがそれを助けるメカニズムが明白だった。

ユダヤ人にとっては、シオニズムは善であり、11.7の攻撃はホロコーストの再来であり、(ポストにもそれを関連付けるイラストがしばしばみられる)ネタニヤフとトランプ首相が合同会見をして、ハマスに72時間内に装備をとけば停戦する、という状況が9月30日時点で流れてくるが、日本はガザへの侵攻に焦点が当たった報道が多い。ネタニヤフの停戦条件はそれなりに納得させるものもあるし、イスラエルからのポストでは、ガザの虐殺は遠景からみる爆撃や、原爆のあのような破壊された街、攻撃準備をしている軍と、軍を魅力的に魅せる女性兵士の姿だけで、子どもや生きている人の遺体は映らない。つまり、おそらくは検閲により、ガザの人々の状況はほとんどイスラエルに届かないのは明らかだ。ハマスをテロリストと呼ぶのはほとんど当然となっている。イスラエルが繰り返し流すポストは、10月7日のハマス攻撃で亡くなった美しい少女や赤子や、人質に取られた人の写真である。

戦後80年目において、現実には戦争が起きている中で、日本にニューメディアとして届くのは、ガザがメインであること、またSNSがイスラエルとその他の国を分断していることを強く感じざるを得ない。

以上、この度の戦後80周年を戦争の中で迎える状況の中での報告を終える。日本は軍事化しないかが心配されている、自民党の総裁選が終わり、現在、日本は危機の中にあるが、ポストはそのための言説や奈良の鹿の話や、オールドメディア批判で埋め尽くされていた。私たち島国の人間が国際的な活動をするためには、やはり現地の情報が非常に重要であることを、今回のフィールドワークでさらに確認することとなった。ねがわくは、捕虜の子ども達の世代と交流しながら、本問題の最終的な(日英同盟に流されるのではなく)解決を図りたいと願うものである。



図1 献花する日本の代表団

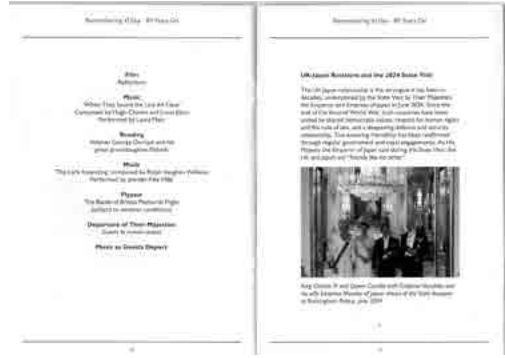


図2 VJデイパンレットの中の皇室・王室の写真



図3 楓の森と日本の櫻を植えた後の立て看板



図4 和解の石



図5 礼拝の様子